



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4307号 2018.4.7 発行

京都) キッチンカーカフェが営業開始



宮津の福祉施設 朝日新聞 2018年4月6日
キッチンカーで調理したランチを楽しむ親子=宮津市波路
昨秋に開所した宮津市波路の複合型福祉施設「マ・ルート」で今月、キッチンカー



カフェ「TEO-TORI」が営業を始めた。軽トラックを改造した車で調理し、施設の利用者たちが接客。天橋立を望めるテラスで食事を楽しめる。

人気のランチメニュー「ピクニックセット」(税込み500円)は、地元産の素材にこだわる。ハウレン草や大根、甘夏は市内の畑で取れたものだ。稲穂三和子施設長は「ここは海の眺めがすばらしい。地域の人がくつろげる居場所になってほしい」と話す。

今月初め、母親と一緒に訪れた市立宮津小学校5年の上辻日和(かみつじひより)さん(10)は「潮風を感じて食べるランチはとってもおいしい」と喜んでた。

営業は平日の午前11時から午後5時、ランチは午後2時まで。問い合わせはマ・ルート(0772・20・1150)。

かがやきの杜 「豆腐作り頑張る」



吉谷さんが入所 京丹後 /京都

毎日新聞 2018年4月5日
満開の桜の下で笑顔を見せる吉谷心さん(左)と母親の美紀さん=京都府京丹後市久美浜町で、塩田敏夫撮影

京丹後市久美浜町の社会福祉法人久美の浜福祉会「かがやきの杜」で4日、入所式があった。新たに加工班の仲間として豆腐作りに挑戦する吉谷心さん(18)が「豆腐作りを頑張ります」と決意を述べた。

吉谷さんは今春、府立与謝の海支援学校を卒業した。体を動かすことが好きで、サッカーやバスケットに取り組んできた。料理も得意で、自ら希望してかがやきの杜の門をたたいた。決意表明を聞いた母親の美紀さん(38)は「自分の考えをしっかりと言葉にしており、頼もしいと思いました」と笑顔を見せていた。

式後、吉谷さんたちは満開となった桜の下で記念撮影した。風が吹くと、花吹雪となって散り始めていた。【塩田敏夫】

0～2歳児に特化の屋外施設オープン 箕面市立総合保健福祉センター

産経新聞 2018年4月6日

箕面市は、市立総合保健福祉センター（同市萱野）の1階敷地内に、全国的にも珍しい0～2歳の乳幼児に特化した屋外施設「たのしいば」をオープンした。屋外施設は公園など年齢層を限定しないケースが多い。乳幼児の育児は手間がかかり、親子が家にいることが多くなることから、保護者と子供で外出できる場をつくろうと開設した。

敷地面積1110平方メートルで、うちゴムチップを埋め込んだ部分を180平方メートル設け、安全面に配慮。ハイハイやよちよち歩きの乳幼児が動き回れる。また、すべり台や車の遊具のほか、かくれんぼに最適のトンネルがついた遊具や取っ手を引っ張ると音が鳴るミュージックプレイパネルなどを配置した。このほか、テーブルやベンチも設置しており、保護者は子供が遊ぶ姿を見ながらくつろげる。

市子育て支援課の担当者は「育児中の人と交流し、子育てについて情報交換してもらえれば」と話している。無料で無休。問い合わせは同課（電）072・724・6738。

広い敷地に遊具なし、どろんこ保育園開園 春日市最大3300平方メートル 築山ではだして遊ぼう【福岡県】

西日本新聞 2018年04月06日



園庭の築山が印象的な春日どろんこ保育園

春日市小倉東に今年、一風変わった保育園が開園した。「春日どろんこ保育園」（認可保育所）。敷地面積は約3300平方メートルで市内最大。園庭に滑り台やジャングルジムといった遊具はなく、代わりに築山で文字通り、はだしてどろんこになって遊ばせながら、

保育することを目指している。

運営は社会福祉法人「どろんこ会」（東京・渋谷区）。関東を中心に全国で61の認可保育所を運営しており、春日どろんこは九州で初めての保育園だ。

各地で待機児童が問題になる中、法人側は数年前から福岡都市圏での開園を検討。適当な土地が見つかったため2016年、市に開園を申し入れた。ちょうど市側も保育ニーズの増加が見込まれた時期で、双方の思惑が合致した。定員150人で、保育料は市内の認可施設と同じ。市外法人による保育園の開設は市内では初のケースという。

北原由美施設長によると、子どもたちが滑り台などの遊具を望めば、職員も一緒に手作りする。「自然の山で遊ぶイメージです」。園庭と、園舎内の子育て支援室「ちきんえっぐ」は地域にも開放。原則、日曜日以外の午前9時半～午後4時半に、事前の申し込みなしで公園のように利用できる。7日に現地に関係者を招いて内覧会とセレモニーが開かれる。

障害ある生徒の通級指導、45都道府県の高校で実施 4月から可能に

産経新聞 2018年4月6日

文部科学省は6日、障害のある生徒が通常学級に在籍しながら必要に応じて別室などで授業を受ける「通級指導」を4月から45都道府県と5政令指定都市の一部公立高校などで導入したと発表した。

文科省によると、公立小中学校では平成29年度、言語障害や自閉症、注意欠陥多動性障害（ADHD）などの障害がある児童生徒約11万人が通級指導の対象となった。こう

した状況を踏まえ、同省は高校でも一定の単位数を超えない範囲で、30年度から通級指導を実施できるよう省令改正していた。

高校や地域の公共施設などを利用した通級指導教室の設置予定数を自治体ごとに見ると、兵庫県と山口県の9カ所が最も多く、群馬県、宮崎県、神戸市が8カ所だった。都道府県のうち、30年度に通級指導を実施しないのは栃木県と三重県で、いずれも31年度から始める予定という。

脳卒中 アルツハイマー薬応用でリハビリ効果アップ 毎日新聞 2018年4月6日

脳卒中後のリハビリ効果を大幅に高める可能性がある薬を見つけたと、横浜市立大と富士フイルム傘下の富山化学工業（東京）などの研究グループが6日付の米科学誌サイエンスに発表した。もともとアルツハイマー病の薬として開発されたもので、マウスとサル動物実験で効果を確認した。富山化学工業は今秋以降に約40人規模の患者に治験を始める。

この薬は脳卒中で損傷した部分に効き、リハビリと併用すると脳の情報伝達をつかさどる「受容体」の働きを増やす効果がある。

グループは脳を損傷させたマウスで前脚でえさを取るリハビリをさせ、取れるまでの時間などを測った。投薬したグループでは、約50日でほぼ損傷前と同じ運動機能が回復。リハビリだけだったり、投薬だけだったりしたグループでは、ほとんど回復しなかった。

同じく脳を損傷させたカニクイザルでは、狭いところのえさを指でつまんで取る、より細かい動作のリハビリをさせた。投薬しなかったグループはほとんど効果がなかったが、投薬したグループは約30日で機能がほぼ回復した。

グループの高橋琢哉・横浜市大教授（神経科学）は「指でつまむ動作は生活に密接に関わるが、これまでリハビリしても回復が難しかった。大きな効果が期待できる」と話す。【酒造唯】

介護用語 外国人に易しく 「難解で挫折」防ぐ教え方を 読売新聞 2018年4月6日



介護現場で使われる用語の教え方を学ぶ受講生たち（都内で）

介護現場で使われる難解な日本語を、外国人にどう教えるか。こんな課題を打開しようと、介護職員や日本語教師が、外国人に日本語を教えるのに必要な知識や指導方法を学ぶ取り組みが始まっている。

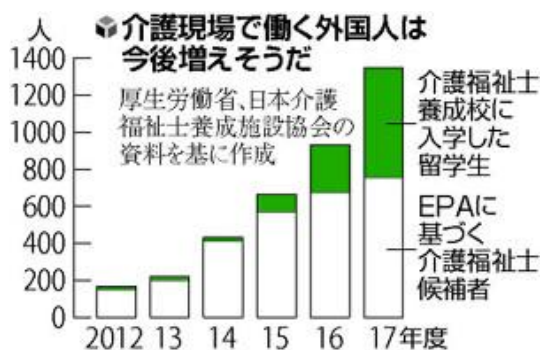
■職員・教師向け講座

「うがいは一般的な表現ですが、職員同士では、含嗽という用語を使うこともあります。利用者の状態や施設によっては、『がらがらペー』などといってお年寄りに声かけをすることもあります」

「資格の大原 東京水道橋校」（東京）で、2月下旬に行われた「介護の日本語教師」の養成講座。介護職員や、社会福祉法人の運営する日本語学校の教師ら約20人は、講師の話に耳を傾けていた。

この講座は、介護現場でよく使われる言葉を外国人に教えるために必要な知識や指導法を、計36時間の授業（計12回）で学ぶ講座。

都内の専門学校で、介護福祉士を目指すフィリピン人やベトナム人の生徒約30人に教え



ている女性（62）は、「平仮名をようやく読める水準の生徒たちに、専門用語をどう学んでもらおうか。いつも頭を悩ませている」と話す。

■高まるニーズ

こうした講座はまだ少ないが、ニーズは今後高まるとみられる。2025年に38万人の担い手が不足すると見込まれている介護現場では、外国人を受け入れる動きが強まっているからだ。

日本と外国の経済連携協定（EPA）に基づく受け入れがあったが、17年9月からは、日本の専門学校などの養成校を卒業して介護福祉士の資格を得た留学生も可能になった。同年11月には、建設や農業などに限られていた技能実習生も介護分野で働けるようになった。年内に来日する見込みだ。

ただ、せっかく来日しても、一通り言葉を理解できないと、日本人職員との意思疎通が難しくなり、清掃など利用者とかかわりのない仕事ばかりを任される恐れもある。

同講座で教える三橋麻子さんは、「同じ意味でも、利用者や家族には平易に、職員同士では専門的に言い換えられがち。意欲の高い人たちが難解な日本語の壁で挫折してしまうのはもったいない」と、外国人への丁寧な指導の必要性を強調する。

■現場の意識改革も

一方、難解な言葉を使う現場職員の意識を変えていく必要もありそうだ。

介護現場で専門用語や短縮語がよく使われるのは、職員同士の意思疎通を簡単に図る意味もあるが、介護職のほか、看護師や理学療法士など様々な職種の人が働いていることも大きい。

「専門用語で、話したり、引き継ぎ記録を書いたりしてこそ、一人前という意識もあるのでは」。「やさしく言いかえよう 介護のことは」（三省堂）の編著者でもある専修大文学部の三枝令子特任教授は指摘する。

三枝さんは、「平易な言葉を使うことは、利用者のためにもなる。外国人を担い手として考えるのであれば、施設の経営者を含め、受け入れ側も意識を変える必要がある」と話している。

教材や関連書籍も続々と

介護現場で働く外国人のため、教材の開発や書籍の刊行も相次いでいる。

公益社団法人「日本介護福祉士会」は昨年11月、技能実習生向けの教材「介護の日本語」をホームページに掲載した。歩行器などの福祉用具や、調味料などの食事に関する言葉など計267語をイラスト付きで収録したほか、入浴や体調確認などの場面を会話形式で紹介している。

ミネルヴァ書房から今年2月に出版された「5か国語でわかる介護用語集」は、現場で使われる基本的な日本語約1500語を、英語、中国語、ベトナム語、インドネシア語に翻訳した一冊。日本人と外国人が現場でコミュニケーションを取るのに役立つ。中央法規出版も昨秋、介護の知識や業務を学びたい外国人向けに計4冊を出した。（板垣茂良）

◆介護現場で使われる用語と言い換え例

どうしょく（盗食）	他の人のを食べてしまう
てきべん（摘便）	便を指で出す
にゅうきん（入禁）	入浴を取りやめる
せんたい（洗体）	体を洗う
えんぱい（円背）	背中が曲がること
ほうしつ（訪室）	部屋に行く
がんそう（含嗽）	うがい
びへい（鼻閉）	鼻づまり
しゅちょう（腫脹）	はれる
しんせん（振戦）	ふるえ
りゅうぜん（流涎）	よだれ
びおんとう（微温湯）	ぬるま湯

※「やさしく言いかえよう 介護のことは」（遠藤織枝、三枝令子編著）より抜粋

自殺未遂者 救急搬送の10代対象に新支援 医療と福祉連携、再発防ぐ 浜松市精神保健福祉センター / 静岡

毎日新聞 2018年4月6日

浜松市精神保健福祉センターは、救急病院に搬送された10代の自殺未遂者を対象にし

た新たな支援をする。未遂者は再び自殺を図る割合が格段に高いとされており、医療と福祉の連携により、精神科医療や各種相談窓口に円滑に紹介し、自殺を防ぐのが狙い。関係機関に周知するなどして、今夏に始める。【奥山智己】

「自殺や未遂の背景を掘り下げる時期に来ている」。先月中旬、同市中区のセンター内にある会議室。医療や福祉の関係者、センターの職員らが集まり、未遂者の支援について意見を出し合った。

厚生労働省の自殺対策白書によると、日本の自殺者数は2003年をピークに減ってきているが、若年層だけは高止まりしている。15～39歳の死因は自殺が最も多く、15～34歳の自殺率は事故による死亡率の2・6倍に上っている。

一方、厚労省の研究班が14年に発表した調査では、全国17の救命救急センターに搬送された未遂者に精神科医療や生活支援などの支援プログラムを提供したところ、半年間は再発を抑止する効果が認められた。市精神保健福祉センターは未遂者の対応マニュアルを整備するなどしてきたが、市内の既遂者の中で過去に自殺を図った未遂者は約2割もいたことなどから、新たな支援を検討してきた。

支援事業は、市内3カ所の救急病院に搬送された20歳未満の未遂者で、身体の治療が終わった人が対象。本人や家族が希望したら、センターの保健師や、市が委託した社会福祉法人「天竜厚生会」（天竜区）でソーシャルワーカーをしている精神保健福祉士らが協力し、本人や家族を訪問して面接したり、電話相談に乗ったりする。

そうした中で、未遂に追い込まれた複雑な背景や要因を整理し、精神科医療や個別の問題に応じた相談窓口など、必要な支援機関につないで継続的に支援していく。事業費の予算は、約176万円を見込んでいる。

精神科医の二宮貴至・センター所長は「自殺に至る前の若い人を孤立させないようにしていきたい。医療と福祉を円滑に連携させ、浜松方式の支援体制が整備できれば」と話す。

障害者目線で観光サイト...バリアフリー情報を英語で発信 読売新聞 2018年04月06日



江戸川のグリズデイルさん

「障害者の視点を生かし、観光地の情報を発信したい」と語るグリズデイルさん（4日、江戸川区のアゼリー江戸川で）＝池田創撮影

カナダ出身で江戸川区内の福祉施設で働くグリズデイル・バリー・ジョシュアさん（37）が、全国の観光地のバリアフリーの状況をまとめたインターネットのサイトが好評だ。自身も脳性まひの影響で車いすで生活しており、実際に足を運び、不便に感じたことを英語で発信している。5月には街づくりについて話し合う同区のイベントに参加し、障害者の視点から講演も行う。

グリズデイルさんは、生後半年で脳性まひを発症し、両手と両足が思うように動かせなくなり、4歳頃から電動車いすで生活するようになった。カナダの高校で日本通の教師に出会ったことがきっかけで日本に関心を持った。黒沢明監督の映画や木村拓哉さんが出演したドラマなども見ていたという。

2000年に初めて来日し、台東区の浅草寺などを巡った。地下鉄の階段を下りられずに困っていたときには「大丈夫ですか」と駅員が声をかけてくれ、6人がかりで100キロ以上ある電動車いすを持ち上げてくれた。「日本ならではのおもてなしを受け、とてもうれしかった」と振り返る。

07年から江戸川区で暮らし始め、知人の紹介で12年から同区の福祉施設「アゼリー江戸川」に勤務し、ホームページの管理などを担当している。休日に各地の観光地に足を運んだが、障害者向けの情報を提供する英語のサイトが少ないと感じ、15年に「アクセシブル・ジャパン」を開設した。

上野公園や新宿御苑、東京スカイツリーなど約50か所について、見所に加えて、障害者用トイレの場所や、エレベーターが利用できる地下鉄出口などを細かく記した。ホテルについても、トイレの広さなど障害者が必要としている情報を提供している。

サイトを見た海外の障害者からは「足が不自由で日本に行くのが不安だったけれど、勇気もらった」などの声が寄せられているという。

江戸川区はこうした活動に注目し、街づくりについて話し合う市民会議「えどがわえどぎわ

江戸 際会議」にゲストとして参加を求めた。5月の同会議で講演する予定という。

グリズデイルさんは、2020年東京五輪・パラリンピックに向けて、サイトをさらに充実させたい考えだ。「海外の障害者に日本の魅力を発信して、今まで日本人たちに助けられた恩返しをしたい」と意気込んでいる。

アクセシブル・ジャパンのアドレスは、<https://www.accessible-japan.com/>

市広報紙、筋ジストロフィー患者に校閲委託

読売新聞 2018年4月6日

親指2本でマウスを動かし、パソコンを操作する中坪さん(右)と「C o p a i n」のメンバー(府中市で)



東京都府中市は4月から、障害者の就労支援などを目的に、市広報紙「広報ふちゅう」に掲載するお知らせ記事の修正、校閲作業を、筋ジストロフィーの患者団体「C o p a i n (コパン)」に委託する。

市は広報紙を月3回出しているが、各課から出された原稿をリライトして仕上げるまでに3日間しかない。そこで、業務の効率化や障害者の活動支援のため、催し物や講座などを紹介するお知らせ記事について、作業の委託を検討。2016年4月から、市障害者福祉課の紹介で、市の会議録の作成を請け負っていた同団体に白羽の矢を立てた。

1年間36号分の委託費は約40万円。市広報課は「大変な面もあるが、期待している。今後、業務や委託団体の拡大も検討している」としている。

「公的な仕事、やりがいある」

団体の代表は府中市の中坪勇祐さん(31)。体力面や勤務条件が合わず、帝京大学経済学部を卒業後も就職できなかった。

2011年12月、大学や専門学校を出ながらも仕事がない同じ病気の仲間と、自分たちの働く場を作ろうと「C o p a i n」を設立。インターネットやスカイプを活用し、在宅勤務で名刺作成やデータ入力などの仕事を請け負っている。

メンバーは東京、神奈川在住の20～30歳代の5人。中坪さんは両手親指でマウスを操作し、パソコン画面上のキーボードで業務をこなす。「定期的な仕事は一定の収入になるし、社会につながる公的な仕事はやりがいがある」と話している。

アニメ作家 高畑勲さん死去 「火垂るの墓」などの作品

NHK ニュース 2018年4月6日



宮崎駿監督と並ぶ日本アニメーション界の巨匠で、「アルプスの少女ハイジ」や「火垂るの墓」などの作品で知られる、アニメーション作家で監督の高畑勲さんが、5日、都内の病院で亡くなりました。82歳でした。

高畑さんは三重県出身で、東京大学文学部の仏文科

に在学中、フランスの長編作品「やぶにらみの暴君」に影響を受けて、アニメーションの世界に関心を持つようになりました。

昭和34年には東映動画、今の東映アニメーションに入社し、昭和43年にアニメーション映画の金字塔とも言われる「太陽の王子ホルスの大冒険」で初めて監督を務め、注目を集めました。

昭和46年には後輩の宮崎駿監督とともに退社して、会社を移籍しながらテレビシリーズの「ルパン三世」や「アルプスの少女ハイジ」、「母をたずねて三千里」それに「赤毛のアン」などの作品を手がけました。また、宮崎監督の「風の谷のナウシカ」にはプロデューサーとして参加し、人間と自然の関係性を壮大なスケールで描き、高い評価を受けました。昭和60年には宮崎監督とともにスタジオジブリを設立し、その3年後に公開した野坂昭如さん原作の映画「火垂るの墓」では戦争に翻弄される兄と妹の姿を描き、モスクワ児童青少年国際映画祭でグランプリを獲得しました。

その後も、「おもひでぼろぼろ」や「平成狸合戦ぽんぽこ」、それに「ホーホケキョとなりの山田くん」など社会的なメッセージが込められた作品を多く発表しました。高畑さんは平成21年には、ヨーロッパの伝統ある映画祭、スイスのロカルノ国際映画祭で、映画界への長年の貢献が評価され、名誉豹賞を受賞しました。

さらに、平成25年に14年ぶりの長編映画「かぐや姫の物語」を発表し、その独特な映像美が話題となって、後にアメリカのアカデミー賞にノミネートされたほか、平成26年には、世界最大級のアニメーションの映画祭、フランスの「アヌシー国際アニメ映画祭」でアニメーション映画の発展に貢献してきた監督に贈られる「名誉クリスタル賞」を受賞するなど、国際的にも高く評価されてきました。

また、平成27年にはフランスの芸術文化勲章を受章し、高畑さんは「名誉ある勲章をいただき大きな誇りを感じる」と喜びを語っていました。

関係者によりますと高畑さんは、5日、都内の病院で亡くなったということです。82歳でした。

大塚康生さん「残念でしかたない」

「ルパン三世」や「未来少年コナン」などで高畑さんと仕事をともにしたアニメーターの大塚康生さんは、「残念でしかたがない。あれほどの才能のある方はほかにいない。たくさん思い出があり、ひと言では語れないが、とても物知りな方で話が合ったのを覚えている。仕事では意見をはっきり主張する人で、僕が話を聞くばかりだった。思い出が多すぎて本当に言葉が出てきません」と話していました。

妊婦に保育所希望調査、潜在的な需要把握へ…東京・豊島区 読売新聞 2018年4月6日

東京都豊島区は、区内の妊婦たちに認可保育施設の利用を希望するかどうかを尋ねるアンケートを始めた。これまでの調査では、0～5歳児のいる子育て世帯を対象にしていた。妊婦の意向を調査することで潜在的な需要を把握し、エリアごとに必要な施設を設置するために役立つ。区によると、今年4月1日時点の待機児童数は、2年連続でゼロになった。ただ、認可保育施設の利用を希望する子どもの人数は毎年200人～500人のペースで増えており、今年度も500人～600人程度増える見通し。新たなアンケートは、「保育施設を利用したいか」「どの地域に所在する保育施設を選ぶか」など7項目で、区が妊婦に母子健康手帳を渡す際に実施。3月1日から実施し、同月22日時点で103人が回答しているという。高野之夫区長は3月下旬の記者会見で、「新たな調査によって、正確で的確な施設の整備が可能になる。豊島区は妊娠時から保育を考えていく」と述べた。

介護のイメージアップに リクルートがムック本出版

福祉新聞 2018年04月06日 編集部

(株)リクルートキャリアはこのほど、介護業界のイメージアップに向けたムック本を出版した。介護職と利用者のエピソードを紹介するとともに、ICT（情報通信技術）活用の実例についても掲載。担当者は「介護現場のイメージアップにつながれば」と話している。

表紙は社会福祉法人常盤会が運営する特別養護老人ホーム「ときわ園」の職員と利用者を起用した。外出好きな利用者に元気になってもらおうと、職員が利用者の地元を車で回るツアーを企画。ますます元気になったエピソードが掲載されている。

社会福祉法人の友愛十字会や京都老人福祉協会、(株)ニチイケアパレスなど複数の高齢者施設も載せている。

HELPMAN
JAPAN



これらの介護をつくる人たち。 RECRUIT

ムック本の表紙

特集では、ICTを活用した介護現場を紹介している。

社会福祉法人善光会は法人内に介護ロボット研究室を立ち上げた。介護ロボットスーツ「HAL」を導入。また、移乗の動きを分析して、適切な動作にする機器も取り入れたことで、職員の腰痛が大幅に減ったという。

このほか、現場で働く職員のインタビューや、ベッドと車いすを一体化する次世代の機器を開発したパナソニック（株）の担当部長への取材記事もある。

ムックは養成校などに配布する予定。担当者は「親の意向を受け学生が介護現場への就職をためらうケースもある。そうしたネガティブなイメージを払拭し、介護に興味を持つ学生を増やせれば」と話している。就職フェアなどでムックを活用したい介護事業所には、実費で頒布するという。

「ひとりじゃないよ」 親が精神疾患の子、ともに語ろう 朝日新聞 2018年4月6日

親が精神疾患の子どもらが、体験を話し合う会が14日午後1時半～4時半、大阪市中央区法円坂1丁目の「アネックスパル法円坂」で開かれる。病気に起因する親の言動に困っても、周りに相談できないケースが多く、安心して話せる場を提供するのがねらいだ。

精神疾患がある人の家族で作る全国精神保健福祉会連合会（みんなねっと）主催。親が精神疾患の人たちが小グループに分かれ、お互いの体験を話す。話したくない人は、聞くだけでいい。会には、家族支援を研究する蔭山正子・大阪大准教授ら専門家も参加し、話し合いをサポートする。蔭山さんによると、親の言動に傷ついたり、子どものころから親の代わりに家事をしてきたりした人は少なくない。だが、精神疾患に対する社会の偏見は根強く、家族の雰囲気などから「親の病気を他人に話してはいけない」と感じ、悩みをひとりで抱え込んでしまうケースが多いという。蔭山さんは「子どもらしい子ども時代を過ごせず、大人になってから生きづらさを抱える人もいる。自分以外に、親が精神疾患の人を知らないケースも多い。自分だけではない、ということを感じてほしい」と話す。参加無料で高校生以上が対象。支援者も参加できるが、子どもの立場の人同士が話す場には参加できない。参加希望者は、メールに氏名、精神疾患がある当事者からみた自分の立場（続柄など）を書き、蔭山さんの研究室（kodomoftf.osaka@gmail.com）に申し込む。（長富由希子）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行